

平成三十一年二月三日(日)午後一時始
於石川県立能樂堂

弓八幡

(能)

ツレ 高野 秀幸
シテ 佐野 玄宜

大鼓 原岡 一之
小鼓 住駒 俊介
太鼓 麦谷 暁夫
笛 江野 泉

ワキ 平木 豊男
ワキツレ 北島 公之

ワキツレ 渡貫 多聞
間 清水 宗治

後見 渡邊荀之助
福岡 聡子

地謡
米島 和秋 高橋 憲正
谷 清士 佐野 由於
山崎 健 高橋 右任
松本 博 藪 克徳

休憩 二十分

胡蝶

(連吟)

山本 貢伸
中村 清
酒井 章
浅谷 之信

(狂言)

宝の槌

太郎冠者 炭

哲男

主人 荒井 亮吉
すっぱ 能村 祐丞

後見 中尾 史生

(能)

シテ 島村 明宏

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 河原 清
笛 吉野 晴夫

巴

ワキ 苗加登久治

間 山田 讓二

後見 藪 俊彦
松田 若子

地謡
寺田 茂 高橋 憲正
岩井 嘉樹 広島 克栄
笠間 啓 渡邊 茂人
田屋 邦夫 佐野 弘宜

能 弓八幡 (ゆみやわた)

如月初卯の日、後宇多院に仕える臣下たち(ワキ・ワキツレ)が宣旨により男山石清水八幡に参詣します。御神事の郢曲(神楽)に陪従(楽人)として加わるためです。そこへ老若二人の参詣人(前シテ・ツレ)が来合わせて、治まる御代と君を守る神を称えかつ祝います。翁が錦の袋に入れた弓を持つわけを尋ねると、翁は勅使を待って君に捧げ物をするといひます。桑の弓と蓬の矢は神代・周朝から、それを袋に収めることが天下泰平の瑞相とされます。それを君に捧げようという八幡大菩薩の神託でした。翁はさらに詳しく八幡神の宇佐から男山への遷座や神功皇后由来の神祭のいわれを述べて、自らを高良の神と名乗り、神託を疑うなかれと言いついて消え失せます(中入)。山には音楽が聞こえ異香が薫るなか、奇特を待つ臣下たちの前に再び高良の神が今度は颯爽とした男体(後シテ)で影向し、夜神楽に興じて神楽を舞い、君の御代を守る八幡の神徳を称えます。

狂言 宝の槌 (たからのつち)

主人の言い付けで宝を買いに都へ出た太郎冠者、「宝買います」と呼ばれるうちに、宝屋を名のるすっぱが近づき、古い太鼓の撥を見せて、昔為朝が持ち帰った蓬萊の島の宝の一つ、打ち出の小槌と偽って、万足で売り付けます。怪しげな呪文を教わり、脇差(すっぱ所持の物)を出して見せられた太郎冠者はすっかり信じて、帰館後主人の希望で馬を出そうとしますがもちろん失敗。苦し紛れに呪文に掛けて主人の繁栄を予祝し、喜ばれます。

能 巴 (ともえ)

木曾の山家を出た僧一行(ワキ・ワキツレ)が江州粟津が原の神前で涙を流す女(前シテ)に出会います。女は行教和尚の故事を引きこの場所には木曾義仲を祀ると教えて合掌します。さらに僧に一夜の読経を頼み、入相の鐘の響く頃、亡者を名乗って草陰に消え入ります(中入)。その夜、回向する僧の前に甲冑姿の巴(後シテ)が現れ、義仲の最期に女ゆえに捨てられた恨みを述べます。自らを武士と心得る巴は生きよとの君命が口惜しく、しかし君命には従って去り、死後も君辺に仕えて主君の成仏を願うのでした。最期の別れを思い出して涙にむせぶ巴は群がる敵を長刀で切り払い、形見の小袖と肌の守りをいただいて武器を捨て、女姿に変わって木曾へ落ち行く様を再現した後、その折の後ろめたさが執心となり、浮かばれない我が身はどうぞお弔いくださいと訴えます。義仲の死因を流れ矢(平家物語)から自害に変え、別れ行く女武者の心の葛藤に光を当てた作品です。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十一年三月三日(日) 午後一時始

(能) 三山 (狂言) 蝸牛 (能) 春日龍神